
勇者，その名は魔界王子 1章

橘明

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

勇者、その名は魔界王子 1章

【Nコード】

N9375A

【作者名】

橘明

【あらすじ】

ひよんな事から勇者にされてしまった魔王の息子サウザントは、赤毛の武闘派少女シーラ（+アルファ）と共に、さらわれた聖魔導師を救う為に海底の道に行く。裏返し王道ファンタジー。

プロローグ

赤毛のシーラは、いつも海岸から沖を眺めていた。

水平線の彼方、世界の中心にあるという暗黒の世界。『私』の母さんを殺した魔物達を操る魔王が住むという世界。魔王の居城があるはずの、そびえる魔の山に思いを馳せ、…いつか必ず、『私』の手でこの世界を救ってみせると、14才になったばかりの少女は、そのエメラルドの瞳に強い光をたたえ、誰にともなく誓っていた。

その頃世界は闇におおわれていた。世界のあらゆるところで、魔物が『人間共』を苦しめていた。故に『人間』は限られた聖域で息を殺して暮らすしかなかった。けど『私達』は力強かった。踏まれても、踏まれても、希望を忘れなかった。我々の忍耐に報いてか、ある日、天は『予言』通り希望の子を地上に遣わされた。

天空の使者、光の戦士、救世主、勇者、色々な名前で呼ばれたけれど、とりあえず、地上で彼が与えられた名前は『ミリオネス』という平凡な名前だった。ミリオネス・クライストス・ホワイト・ウインドというのが彼のフルネームだったが、近いものは『ミリオ』と呼んでいたらしい。

3才になるかならぬかのうちに、光魔法を自在に操り始めた彼の名は、すぐに聖域という聖域に…つまりは全世界の人々に知れ渡り、この世に大いなる希望をもたらした。

いつか勇者様が魔王を倒し、この世界に平和に導いて下さるのだと…。

祝祭の日

武器屋の娘、シルリア・ウエイントンが、珍しく鏡をのぞき込んでいました。ウェーブのかかった赤色の髪に花飾りをつけようとしたり、でも、果たして、髪の毛のどの位置につけるのが一番ふさわしいか迷って、さっきからずっと鏡とにらめっこしているのです。なにしろ、普段は、ブラシの代わりに剣を、鏡のかわりに盾を持っているような少女だったので、こんな時どうしていいのか、よく分からないのでした。

けれど、母さんの形見の小花模様のブラウスと紅色のドレスは、思っていたより自分にぴったりで、気をよくしたシルリアは、モスグリーンのベストを羽織ると、ドレスの裾をもちダンスを踊るように鏡の前でぐるりと一回転しました。

「おーい、シーラ」

階下から武器屋のオヤジ、アルマンの声が聞こえて来ます。

「まだか？ 先に行っちゃまうぞ」

「まって、パパ」

シルリア…シーラは階下に向かって返事をしました。

その日、海辺の町サンマリネでは、盛大なお祭りが開催されました。

青空には花火が弾け、海岸沿いの道には露店が並び、港に停泊する船という船にはカラフルなデコレーションが施されています。

丘の上の教会の尖塔をながめながら、シーラとアルマンは石畳の道を歩いて行きました。どこからか、楽隊の演奏が聴こえて来ます。その音色に合わせ、輪を描き踊る人々がいます。

「こんなに、にぎやかなのは、いつぶりじゃろうなあ」

道ばたの老人が子供達に話していました。

「確か、先々代の国王様が結婚なされた時以来じゃから、何十年ぶ

りになるのじゃろつな。それくらい、今日はめでたい日だということじゃ」

やがて、シーラとアルマンの視界に、大きな門が見えて来ました。あれは、村と外の世界を仕切るために作られたものです。いつもはしっかりと閉じられた鉄の門も、今日は珍しく外の世界に向けて開かれており、その前に黒山の人ばかりが出来ていました。皆、これから起こるであろう素晴らしい瞬間を見のがすまいと必死なのでした。どの顔も一様に希望に輝いています。

シーラとアルマンもご多分にもれず、『彼の人』を見のがすまいとその群れの中に加わり、少しでも、前へ、前へと進んで行きました。

それから、どれくらい待ったでしょう。

突然、門のそばから歓声が上がりました。

同時に、花火の弾ける音が、ポポポポボンと響きます。

シーラは、道の中央を見ようと必死でジャンプしました。何しろ、目の前の男がやたらと長身だったので、そうでもしなければ何一つ見えなかったのです。

やがて、シーラの目に映ったのは、彼女と同じ年頃…14、5才の少年でした。

肩までのびた金色の髪に、サファイヤの美しい瞳をもつその少年は、華奢な体を白銀の鎧で包み、赤色のマントをひるがえし、白馬に乗り、さっそうとやって来ました。その美しさに、シーラが思わず息をのんだ時、どこからともなく声が上がりました。

「勇者様！ 万歳！」

「ミリオン様！ 万歳！」

そう。彼こそが、天から遣わされた光の戦士…勇者『ミリオン』その人だったのです。

数々の伝説をまとった彼は、この世ならぬ神々しいオーラをもまとうようでした。さらに彼の神性を際立たせたのは、その手に携える白銀の剣でした。それは、天界の金属で打たれた剣であり、地上

でこれを装備できるのは神に許された者：勇者だけだといわれております。1000年の時を越え、聖魔導師達の手で守られてきたその剣の鞘には、金の羽模様の装飾が施されており、柄のまん中には虹のように輝く丸い石が埋め込まれています。それは『ホーリー・ストーン』と呼ばれる魔力の込められた宝玉でした。

勇者が町へ入ると同時に、楽隊のラツパの音が響き渡りました。そこへ、町長ヤン・バルクを先頭に町のお偉い方の一団が現れ、勇者に向かいうやうやしく頭を下げました。

「ようこそ、サンマリネへ。私は町長のヤン・バルクです」

「私は副町長のマイク・スミスです。我々は勇者様を歓迎いたします」

「はじめまして」

勇者ミリオンは馬から降り、町長達に向かつて頭を下げ返しました。

「僕の名前は、ミリオネス・ホワイト・ウィンドです。ミリオンと呼んで下さい。皆様の歓迎に感謝いたします」

「もったいのうございます。勇者様。さあ、こちらへ。歓迎の準備が整っておりますよ」

こうして、勇者は町一番のホテル『マリーネ』に案内され、町長ヤン・バルクを始めとする町の人々の歓迎を受けました。サンマリネのシェフの手による贅沢なディナーと、踊子達の華麗なダンス、芸人達の珍しい出し物など、歓迎パーティーは夜遅くまでにぎやかに続けました。やがて、勇者が自室で眠り、人々もめいめいの屋敷に戻ってしまう頃、町長のヤン・バルクはベッドの中で、今日という大事な日がつつがなく過ぎた事を神に感謝しました。その同時に、恐ろしい事件が起きている事も知らず…。

数時間後、その事実を彼が知った時には、既に何もかもが終わっていました。ただ一つ救いだっただのは、神が彼らに一縷の希望を残された事です。しかし、この事はヤン・バルクと聖魔導師エオリア

により、隠される事になりました。なぜなら、それが、他ならぬ勇者の望みだったからです。

海底からの風

ギイ…ギイ…。

ギイ…ギイ…。

起き捨てられた小舟が波にゆれています。

舟底に寝転がるシーラの視界にカモメの群れが横切ります。

日ざしは暖かく、潮風が頬に心地よく、思わずまどろみかけるまぶたの裏に、あの日見たサファイアの瞳が浮かんでは消えます。

「勇者様」

シーラはつぶやきました。

「今どこにいらっしやるの？」

3カ月前のお祭りの日に勇者を見て以来、シーラは一日たりともその姿を忘れられずにいました。勇者の事を考えるだけで、とても幸せな気持ちになるのです。そんな自分がシーラにはたまらなく不思議でした。

変なの…あたし、馬鹿みたい。

シーラはくすつと笑いました。

元々、シーラは勇者に憧れていました。幼い頃から、魔王を倒す事を夢見ていた正義感の強い少女にとつて、勇者の存在は神よりも偉大だったのです。けれど、その姿を目の当たりにしてから生まれたい『思い』ときたら…！ そのキモチを一言で説明する事は、今のシーラには無理でした。ただ、幼い頃から磨き上げた自分のこの武術で、わずかでも勇者さまの力になりたい、と、一本気な少女は本気で考えておりました。勇者の居所さえ分かれば、今すぐにでも、家を捨て、町を捨てて追いかけて行つたかもしれません。

けれど、奇妙な事に…実に奇妙な事に、勇者はこつ然と姿をくらましてしまったのです。この町を訪れた次の日の早朝に、誰にも行き先を告げず旅だってしまったというのです。それきり、誰も勇者

の姿を見た者はおりません。以前はあれだけ伝わって来ていた勇者の活躍の噂も、ぷつぷりと聞かれなくなったのです。

「ご無事でいらっしやるのかしら？」

シーラは遠い空を見上げてつぶやきました。…と、その時、

ぞ…ぞー…ん。

突然、舟が大きく揺れたのでシーラは驚いて身を起しました。

ぞ…ぞー…ん。

気がつけば、先ほどまで穏やかだった海が、激しくうねっています。波の強さに小舟がギシギシ音を立てています。シーラは砂浜に立ち、激しく波打つ海を見つめました。相変わらず空は青く、風は穏やかなのに、海だけが荒れ狂っています。こんな、奇妙な光景を見るのは生まれてはじめてです。

「おい、逃げろ！」

背後から誰かの叫ぶ声が聞こえて来ました。しかしシーラは動きませんでした。持ち前の好奇心が、この先に起きる事を見極めたがつています。

やがて、うねる波は大きな渦を巻きはじめました。そして、なんという事でしょう！？ 渦は激しく逆巻きながら、海を2つに裂いたのです。裂け目は轟々と音を立てて広がり、そこに、海底に続く暗い道を出現させました。

海からふきよせる湿った風が不吉な予感を運んで来ます。

…魔物が来る？

以前、聖魔導師エオリアがいていた言葉をシーラは今さらのよ

うに思い出していました。『こんな奇妙な事が起きる時は、必ず魔物が襲って来るのだ』と。

彼女は、その時はじめて後悔をしました。なぜ、自分はさっさと逃げなかつたんだろうと。しかし湧き上がる不安を必死でこらえながら、彼女は、愛用の鋼鉄の剣に手をのばしていました。『何ごとか』が起きるにしても、自分がここでそれを食い止めねばなりません。

やがて、気丈にも海と対峙する少女の耳に、ずぶつずぶつと泥を踏む足音が聞こえて来ました。それで彼女は、いよいよ剣にかけた手に力を込めました。

随分と長い時が過ぎたように思えました。あるいは、あつという間のようにも思えました。悲愴な決意を胸に秘めた少女の視線の先の、暗い水煙の向こうから、一人の男が現れました。

そびえる水と水の間に見れた男は、闇色のマントをひるがえしながらこちらに向かって歩いて来ます。彼が歩く後ろから水の壁が崩れ、海底に続く道は泡沫とともに消えてゆきます。近付く程にはつきりして来るその姿は、昔、おとぎ話で読んだ中東の国の王族に似て、長い黒髪に、浅黒い肌、額には紫の石を埋め込んでおります。かなり遠くに現れたはずなのに、あつという間に浜辺に辿り着くと、彼は波の前に立ち、サンマリネの町を一望するかのような遠い目をしました。それから、彼はそこにいる赤毛の少女に気付くと驚いた顔をしました。

「お前は…人間だな？」

その声は、嵐を待つ海のように静かでした。しかし、その瑠璃色の瞳に宿る絶望的な暗さに、シーラは全身の毛がそそけ立つような恐ろしさを感じました。

「そういう、お前は、何？」

しかし、男は彼女の言葉を無視し、

「勇者はどこにいる？」

とたずねてきました。

なんとという事！ 彼は勇者を探しているのです。

「し…知らない」

シーラは首を振りました。例え知っていたところで、彼女は決して教えなかったでしょう。

「そうか」

うなずくと、男は町に向かって歩き出しました。

「待って」

シーラは男を呼び止めました。

「なんだ？」

「あなた…魔物ね？」

男は振り返り、冷やかな笑みを浮かべました。肯定も否定もしません。しかし、答えを聞く必要などありません。返事を待たず、シーラは剣を抜きました。

「魔物を町に入れるわけには行かないわ」

「命を粗末にするな。私は勇者を探しているだけだ。他の人間共には興味ない」

やはり…！ その言葉が彼の正体を語っています。

「信じられるもんですか。とにかく町には一歩も入らせないから」

「くどい小娘だな。死にたくなければ、剣をおさめろ。私は女子供にも容赦はせぬぞ」

「女子供だからってバカにしないで！ 私はこの町一番の使い手なのよ」

それは、嘘ではありません。彼女は、去年の秋に行われた武术大会で大男のウロスを敗って優勝した経歴の持ち主です。自分の強さに自信があるからこそ勇者の手助けも夢見るのです。ところが、それを聞いた男はさもバカにしたように笑いました。

「こんな田舎町で、少々腕がたつからなんだというのだ。世間知らずが」

「なんですって？」

それは、シーラを怒らせるに十分なセリフでした。彼女は逆上し、

剣を構え、魔物に飛びかかりました。

「怒りにまかせて、攻撃してくるとは…やはり未熟だな」

男は余裕たつぷりに剣を交わし、シーラの背後に回りました。シーラも負けてはいません。背後から振り降ろされた剣の切っ先を交わすと、高くジャンプして魔物の額めがけて斬りかかっていきます。その身軽さに、魔物が怯みました。

…勝てる！

そう、思った瞬間、目の前の魔物の姿が消え、背中を何かで軽く叩かれました。弱い力で叩かれただけのはずなのに、体中が痺れ動けなくなりました。薄れて行く意識の中で彼女は思いました。

…負けた？ 私が？ 町を…守れなかった…？

「ママ…ごめん…ね…」

か細い声を上げ、シーラは砂の中に倒れました。

「だから言っただろう」

魔物は冷たい目で彼女を見おろしつぶやきます。

彼は剣の切っ先をシーラの首に当てました。殺そうとしたのでしょうか？ が、しばらくの逡巡の後、剣を鞘におさめ、舌打ちすると町に向かって歩きはじめました。

聖なる光

三日月が、空高く架かっています。

月明かりに照らされた石畳の階段を、例の黒マントの男が重い足取りで登って行きます。

昼間の出来事など嘘のような穏やかな夜。石造りの家々には灯が点り、遠くから打ち寄せる波の音が聞こえています。

階段を登り終えると、目の前に、赤い屋根の小さな家が現れました。入り口には『武器、安く売ります高く買います。港の武器屋サシマリネ』と書いた看板がかかっています。どうやら、武器屋のようです。道はそこで行き止まりになっていました。

男は大きいため息をつくとき、軒下のベンチに腰を降ろしました。さすがの頑強な彼も、すっかり疲れ果てていました。何しろ、ずっと海底の道を旅して来た上に、サンマリネの町の隅々まで歩き回ったのですから……。

遠く聞こえる潮騒が子守唄のようです。その心地よさに身をまかせているうちに、不覚にも彼は眠ってしまいました。

そこへ、パサパサと羽音がして、一羽のコウモリがやってきました。コウモリは軒下にぶら下がるとかん高い声で言いました。

「おい、サウザント。勇者は見つかったのか？」

サウザントと呼ばれた男が驚いて飛び起きました。見上げると、軒先に体長30センチほどのコウモリがぶら下がり、3つの目でこちらを見ています。コウモリは、真っ赤な口を開いて、もう一度たずねて来ました。

「勇者は見つかったのか？サウザント」

サウザントは目をこすりながら答えました。

「カーミンじゃないか。何しに来た？」

「ロムデルの命令で、お前の様子を見に来た」

「ロムデル？ ふん、ハナたれガキのスパイか」

「ハナたれでもサウザントよりは優秀さ！」
そう答えるとカーミンと呼ばれたコウモリは、キィキィ笑いまし
た。

「どっちが優秀かは、俺が決める。勇者を倒せば文句ないだろう？」
「そりゃそうだ。で、勇者は見つかったのか？」

「見つからぬ。しかし、勇者はここにいるはずだ。魔水晶に示され
た奴の消息はここで途切れているのだから」

「町を焼け！ 勇者をいぶり出せ！ ロムデルならそうする」
「命令をするな。俺には俺のやり方がある」

「お前にやり方なんてあるか！ この出来損ない！」

「なんだと？ 生意気なくそコウモリめ！ 焼いてしまっぞ」

「お前にできるもんか！」

「できるか、できないかためしてみるか？」

言い返すと、サウザントは手を広げ呪文を唱えはじめました。手
の平でちらちらと炎が揺らめき始めます。それを見たカーミンは、
慌てて空高く飛び上がり「まあせいぜい頑張れよ出来損ない！」と
捨てゼリフを残して逃げて行きました。

「くそコウモリが！」

サウザントは炎を収め、夜空に向かってつばを吐きました。生意
気なコウモリはとつくに闇に消え去っています。ひどく疲れを感じ
ました。お腹も空いています。…宿屋でも探し、今日のところは
眠りするかと、彼が立ち上がったその時です。

キラリ…！

背後で何かが光りました。

「？」

振り返ると、

キラリ…！

武器屋の中がかすかに何か光っているようです。

それは、一瞬光ったかと思うと消え、しばらくたつと、また光るのでした。

…聖なる光じゃないか！

サウザントは思いました。

…あれは、天界の何者かが操る光だ…しかし、なぜ、こんな汚い家から聖なる光が？

いぶかしく思ったサーザントは武器屋に入って確かめる事にしました。あるいは、勇者にまつわる手がかりを見つけられるかと思ったのです。

店内では、武器屋の親父アルマン・ウェイントンが、いまだ帰らぬ娘、シーラの身を案じていました。

…いくらなんでも、遅すぎる。

親父は、防具を磨く手をとめ、壁にかけられた時計に目をやりました。既に8時を回っています。誰もが顔見知りのこの小さな港町で、誰よりも強いシーラに危害を加える人間がいるとは思えませんが、しかし、それは決して親父を安心させる材料にはなりませんでした。

…そういえば、昼間海が変な荒れ方をしたそうだが…

親父は、人づてに聞いた話を思い出しました。（彼は一日店にいたし、海が荒れたのは短い時間だったので、人に聞くまでその事件

を知らなかったのです)

…まさか、魔物でも現れたんじゃねえか？ 10年前のあの日も、確か海が変な荒れ方したって聞いてるぞ。

さらに親父は想像をめぐらせました。

…で、あの鼻っ柱の強いシーラのバカが、よせばいいのにモンスターに飛びかかって行ったんじゃ…？

親父は身震いしました。それは、人間に襲われるよりもずっと最悪な事態を予想させたからです。

親父の不安をあおるがごとく、窓の外でかん高い鳴き声が聞こえました。聖域にいるはずのない、魔コウモリの鳴き声に似ていました。その無気味な響きに、親父は思わず椅子から立ち上がりました。

…シーラ！…

彼は店を飛び出し、娘を探しに行こうと思いました。

と、その時、扉が開き、黒マントの男が店に入って来ました。サウザントです。彼は、目の前に立っている親父を無視して店内を眺め回しました。例の光の正体を見定めるためです。

壁際の木の棚の上に、武器と防具が整然と並べられています。中央には銀色の鎧を着せられたマネキンが立っています。窓際には白銀の美しい剣が置かれています。しかし、あの光の正体らしきものはありません。

…なんだ、こいつ？

アルマンは、この見なれない客を見つめました。床まで届く長いマントの下に、同じく黒色のラシヤの衣裳をまとい、腰には豪華な金の帯を巻き、半円形の剣を装備しています。この田舎町にはひどく不釣り合いなでたちです。

…どこかの王族か？

その華美な衣裳を見てアルマンは思いました。まさか、目の前にいる男が、彼の愛娘を痛めつけた魔物であるとは想像もしませんでした。なにしろ、サウザントは、彼のイメージする魔物とはあまりにもかけ離れていました。知らぬ者が見れば、人間にしか思えないでしょう。そして、彼の正体が分からない以上、今のアルマンにとっては早く立ち去ってほしい客でしかありませんでした。

「お客さん、何の用ですかね？ 売りに来たのかね？ 買いに来たのかね？ 売り物があれば、そのカウンターに出してくんな」

親父は、早口でたずねました。一刻も早く、娘を探しに行きたかったからです。すると、サウザントが重い口を開きました。

「今、外で不思議な光を見た。この店の中から漏れていた光だが、何が光ったのだ？」

「光？ そのの、ロウソクの光じゃねえのか？」

この客は、この忙しい時に一体何を言い出すのかと、親父は少々イライラしながら答えました。

「ロウソクの光などではない」

「他に光るものはねえな」

「本当に知らぬのか？」

「知らねえよ。くだいな。それだけが用件かい？ だったらとつとと出てつてくんないかな？ 悪いが、もう、店じまいなんだ」

どうやら、親父は本当に何も知らないようです。…では、サウザントが見たあの光は気のせいだったのでしょうか？ …いやそんなはずはありません。きつと、かすかな光だったために、この親父は気

付かなかったのでしょうか。絶対ここには何かがあるはずですよ…！

そう思い定めると、サウザントはここに居座る口実を作りました。

「…いいや。ちょうど剣が欲しいと思ってたところだ。売り物は、これだけか？」

「そっちの奥にも置いてあるか？」

親父は隣の部屋を指さしました。

「見せてもらうぞ」

「さっさとしてくんな！」

親父の返事を待たずに、サウザントは隣の部屋に消えて行きました。親父は舌打ちしました。これでは、しばらく店を離れられませんが。

イライラしながらカウンターに座っていると、扉が開き、また誰かが入って来ました。

「いらつしゃい…」

言いかけてアルマンは目を丸くしました。なぜならそこにいたのは、あれほど待ちわびた娘、シーラだったからです。

「シーラ！ どこに行ってたんだ？ この不良娘！」

安堵と共に怒りが込み上げて来て思わず親父は娘を叱りつけました。が、すぐに娘のただならぬ姿に気付き目を見張りました。

「どうしたんだ？ そのケガ？」

シーラの顔といわず腕といわず、薄く引っ掻いたような傷があちこちにできています。服はぼろぼろに破れ、全身泥まみれです。

「魔物が現れたのよ」

シーラは言いました。

「魔物？」

「…海の底から現れたの。町に潜り込もうとしたから、止めようとしたけど、止められなかった。もう、町のどこかにもぐり込んでるわ」

そう言ってシーラは泣き出しました。魔物の侵入を防げなかった自分のふがいなさが悔しかったのです。

「それが、本当なら、大変じゃねえか！　どんな奴だ？　特徴を
言ってみろ。すぐに聖魔導師様に知らせなくちゃ」

まさか、今さっき入って来た客がその張本人とは夢にも思いませ
ん。

そこへ、何も知らないサウザントが、現れました。

「親父、売り物はこれだけか？」

奥の部屋にも、彼の探す光の正体はなかったようです。

シーラが「あっ！」と叫びました。

サウザントもシーラに気付きました。

「お前は先ほどの…」

「どうした…？」

と、親父がたずねた時には、既に、シーラの鉄拳がうなりをあげ
てサウザントの右頬を打っていました。いや、打ったと思った時に
は、サウザントの体はシーラの後ろに移動していたのですが…。

「パパ！　こいつよ！　こいつが、魔物よ！」

「何？　本当か？」

「本当よ！」

と、シーラは剣を抜き、サウザントに向かって行きました。

「よせ、娘！　私は女子供と戦う趣味はない！」

「バカにしないで！」

サウザントは困惑しました。彼としては、人間の娘と真面目に戦
う気になどなれなかつたのです。それはけっして名誉ある戦いとは
言えないからです。ですから、できれば魔法で眠らせてこの場をや
り過ぎたかつたのですが、あいにくここへたどり着くまでに魔力
は使い果たしていました。その上一日中歩き回ったおかげで、くた
くたに疲れています。一方のシーラは、全身にかすり傷をおって
るとはいえ、長い間浜辺で眠らされていたおかげで体力がみなぎっ
ていました。

「本気でかかって来なさいよ！」

防戦一方のサウザントをシーラは挑発しましたが、サウザントは

頑として剣を抜きませんでした。抜けば、殺してしまうのが分かっているからです…少なくとも彼はそう思ったのです。ところが、その油断が命取りになりました。彼は、自分の体力の消耗を計算に入れていませんでした。

シーラは確かに人間の小娘です。たかが田舎町一の使い手でしかありません。しかし、やはり町一番の使い手なのです。彼女は、サウザントが昼間より疲れている事を敏感に察知していました。ほんの一瞬彼がよろめいた隙を逃さず、剣を降り降ろしました。

剣は、見事に魔物の肩を切り裂きました。

サウザントは、驚きました。まさか、こんな小娘に傷をつけられるなどと思っていなかったからです。これは、バカにできぬと判断した彼は、ようやく剣を抜きました。そして、切っ先をまっすぐにシーラの鼻先に向けました。シーラは手にした剣で、それをはねのけようとしました。が、次の瞬間にはサウザントの姿は消え、シーラの頭上高く飛び上がっていました。

「危ないシーラ！」

愛娘の危機に、アルマンは思わず手近にあった剣を投げました。それは意思を持つかのごとく、まっすぐに魔物に向かって飛んで行きました。そして、剣を持った敵の手をかすめると、音を立てて床に落ちました。その真横に、どうっ…とサウザントも落ちて来ます。肩と腕から真っ赤な血が吹き出し、苦しげにうめいています。

「今だ！ シーラ！ とどめをさせ！」

親父が叫びました。

「うん！」

シーラはうなずいて、魔物の前に仁王立ちになりました。魔物は、剣を杖にして立ち上がろうとしました。ところが、腰を浮かせた途端、剣を持つ右手に激痛が走ります。彼は剣を手放してその場にうずくまりました。

…くそ、どうしてだ？

彼は、右手についた赤い傷を凝視しました。それは、先程親父が投げてよこした剣がつけた傷跡です。どう見てもかすり傷なのに、そこから広がる痛みが、全身に焦がすような苦しみを与えるのです。

…毒でも塗ってあったのか？

それ以外に、この痛みの理由が思い浮かびません。ところが、
『ちがうよ！』

どこからか声が聞こえて来ました。

『僕、毒殺なんてせこい事しないよ。その傷は、純粹に僕の力でつけた傷だよ！』

「…だ…誰だ？」

それは、武器屋の親父とも、その娘とも、明らかに質の違う声でした。サウザントは、かすむ目で辺りを見回しましたが、それらしき人物の姿は見当たりません。

「姿を見せる！」

思わず叫ぶと、小娘が不思議そうに自分を見下ろしました。彼女には何も聞こえていないようです。

…気のせいかな？ バカかな…

しかし、あるいは、痛みに打ちのめされ、壊れかけた意識の産み出した幻聴だったのかもしれない。

「おい、シーラ、さっさととどめをさせ！」

遠くで武器屋の親父が叫びます。

「分かってる」

頭上で小娘が答えました。

サウザントは目を閉じました。迫りくる刃を感じながらも、傷の痛みにも身動きがとれません。

…まさか、こんな所で、こんな小娘の手にかかり、こんな訳の分からない最後を遂げるとは…

悔しさに魔物が歯噛みした時、いきなり、稲妻のように、真っ白な光が店内を照らしました…！

カツ！

光は、激しく輝き、床も、窓も、武器の置かれた棚の輪郭までも真っ白に染めていきました。

カリーン…！

視界を奪われ、シーラが思わず剣を取り落とします。

「何？ この光！」

彼女は片手で目をおおって叫びました。

「聖なる光だ！」

瞳を閉じてサウザントがつぶやきました。そう、それはまぎれもなく、先程窓の外で感じたのと同じ光です。彼は、痛みをこらえ、手探りをしました。光を発している「物」を探したのです。それは自分の真横にあるはずです。光が発する瞬間、自分の真横に聖なる光特有の温かな気配を感じたからです。彼は、「それ」に触れました。その瞬間、指先にするどい痛みが走りました。どうやら、切れたようです。それで、彼は全てを理解しました。

「そうか。剣か…」

彼は、闇の中で用心深く手を移動させ、安全なつかの部分を探しました。

「この剣が、光の正体だったんだ…！」

目を閉じているため、手探りでしか確認できませんが、それは明らかに彼の愛用している円月刀とは違います。かといって、今さっ

きシーラが落とした鋼鉄の剣でもありません。とすれば、残りはアルマンが投げつけ、サウザントに大ダメージを与えたあの剣に違いありません。

『その通り！』

先ほどの声が、頭の中で響き、サウザントはぎょっとしました。『見つけてくれて、ありがとう！ ボクはずっと君の事を待ってたんだよ』

声は先ほどよりもはっきりしています。どうやら、幻聴ではないようです。

「私を？」

『そうさ。お願いがあつてね』

「願いだと？ 一体お前は誰だ？ 姿を見せる…！！」

『今は、姿を見せられないよ。条件がそろってないもの。でも、君にはぜひ力を貸してもらわなきゃいけないから、今からパワーを送るね！』

「パワーだと？」

言い終わるか終わらぬかのうちに、彼は、己の身の内を電流のようなものが駆け抜けていくのを感じました！

「！！！」

脳天で青い火花が散り、体中が焼け付くように熱くなって来ます。心臓がバクバク打ち、口から飛び出しそうです。全身は痺れ、息がつまり、あまりの苦しさに意識が遠のき、とうとうサウザントは気絶してしまいました。と、同時に、光が一気に収まっていきまました。

光が消えてしまうと、シーラとアルマンはおそろおそろ目を開きました。床の上で魔物が気絶しています。

「なんだったんだ？ 今の光…こいつのしわざかな？」

アルマンが言いました。

「違うと思うわ。どうやら『聖なる光』だったらしいわよ」
シーラが答えました。

「なんでそんな事が分かるんだ？」

「その悪党が言ってるのを聞いたもの」

サウザントの側にいた彼女には、その話声が聞こえていたようです。しかし、やはり例の不思議な声は聞こえていなかったらしく、

「こいつ、ずっと1人で喋ってたのよ」

と、付け加えました。

「あれが聖なる光だつていうのなら、その悪党のしわざでないのは確かだな。魔界人に聖なる光が操れるわけねえもん。でも、だったら、誰がやったんだ？」

「誰かしらね？」

首を傾げて魔物をのぞき込んだシーラは「あ！」と叫びました。

魔物が持っている剣がぼんやりと青白く光っているのに気付いたのです。けれど、彼女が気付いたのはそれだけではありませんでした。

「おい！ シーラ。見る！ 剣が光ってるぞ」

アルマンも光に気付いたようです。娘に向かい、しきりに剣を指さして見せます。

「つまり、これが、さっきのとんでもない光の正体ってわけだ！」

彼は、感動したようにしきりとうなずきました。

「そうよ、パパ。でもそれだけじゃないわ」

シーラが言いました。「よく見て。これ、呪いの剣よ」

娘の言葉にアルマンは、「あ！」と叫びました。

「驚いた！ 確かに、こりゃ『呪いの剣』だ！」

さて、彼らの言う『呪いの剣』とは一体なんでしょう？

それは、さかのぼる事、3カ月前。

町長のヤン・バルクと、教会の聖魔導師工オリアが、一振りの美しい剣を持ってアルマンを訪ねて来ました。

「この剣を飾って下さい」

聖魔導師は剣を差出して言いました。

「なるべく、人目につく窓辺に飾っておいてほしいのです」

「窓辺に？」

随分妙な依頼だとアルマンは思いましたが、それは、とても美しい剣だったし、町のお偉いさん2人の頼みという事もあり、引き受けることにしたのです。

ところが、この剣が厄介もので、見かけこそ美しいのですが、それを装備した者は頭痛や吐き気に襲われ、10日も20日も寝込むはめになるのです。その様はまるで「呪われている」ようにしか思えなかったので、武器屋親子はこの剣を『呪いの剣』と名付けてできる限り近付かぬようにしていたのです。それを…。

「…なんでこの悪党が持つてるんだ？」

「パパが投げたからじゃないの？ ほら、あたしを助けるために」

「ああ、あの時か…！ 無我夢中で気付かなかった！ まさか、『呪いの剣』を投げていたなんて…！ よく平気だったもんだ。くわばら、くわばら…それにしても、すげえ力だな。ここまでダメージを受けた奴も今まで居なかったよな」

「死んだのかしら？ ぴくりとも動かないけど…」

「どうかなあ？ もし、死んでいるなら教会に知らせないと…」

確かめようと、親父がおそるそる魔物の顔を覗き込んだちょうどその時！ 魔物がくわつと目を開きました。

「うわ！」

親父は心臓が止まるほど驚いて、そこにひっくり返りました。

「パパ…！」

シーラはとつさに剣を構えようとしてました。その時になって彼女は自分が剣を持っていないのに気付きました。あのとんでもない光がさした時に床に落としたきりだったのです。見渡せば、剣は、なんと、魔物の下敷きになっっているではありませんか！

魔物は、寝転がったまま笑いました。

「なんて力だ！ 魔力も体力もあふれんばかりだ…！ こんな爽快な気分ははじめてだ！」

彼は雄叫びを上げると勢いよく飛び起き、そして、手にした剣を勢いよく振りました。その風圧で、横に置いてあった鋼鉄の甲冑が、ガチャンと崩れます。

「うわ！ 売り物が…」

アルマンが悲鳴を上げました。

「パパ、落ち着いて！」

彼女は床に落ちていている自分の剣を取ろうと手を伸ばしましたが、白い刃に阻まれ動けなくなりです。目の前に魔物の顔があります。少女の鼻先に刃を突き付けて、彼は酷薄な笑みを浮かべました。

「小娘、さつきはよくもこの私をなぶってくれたな。たっぷり礼をしてやる」

少女は舌打ちをしました。後、少して剣に手が届くのに…サウザントは容赦なく彼女の喉元に切っ先を突き付けます。ちくりとした感覚にシーラは思わず身を震わせました。

「生意気な小娘め。しかし、この私に一太刀浴びせた事はほめてやる。そうだな、お前を殺す者の名ぐらいは教えてやる。我が名はサウザント・ローゼン・クロイツ。大ゾーマ帝国のプリンスなり…！」

「大ゾーマ帝国のプリンスだって？」

親父が叫びました。

「つまり、魔王の息子って事じゃないか」

アルマンは、これ以上驚く事がないというくらいに驚きました。

（実際、彼はその日のうちにもっと驚くべき事を見なければいけないことになるのですが）。

魔界のプリンスは、自分の正体に腰をぬかした親父を見て、誇らしげに胸をさらせました。

「ちよつと驚かせ過ぎたかな？ まあよい、小娘。我が名を胸に刻み付け、永劫の炎に焼き尽くされるがよい！」

サウザントは、威嚇するように再び剣を振りました。物凄い風が巻き起こり、売り物の武器や防具が部屋の隅へ吹き飛びます。

「……」

シーラは目を閉じました。あまりの風圧に目は開けられず、動く事もできません。

…このままじゃ、斬られる！

はげしい風の中、少女はなにか助かる手はないか考えました。…冷静に、冷静にと呪文のように唱えて…。

けれど、武器を持たぬ身に、名案など浮かぶわけがありません。にもかかわらず、考える時間は十分にありました。なぜなら、いつまでたつても、敵が攻撃して来なかったからです。

…なぜ、襲って来ないの？

シーラは敵の沈黙を不気味に思いました。

…何か、企んでる？

しかし、一向に、何も起きる気配もなく、とうとう風も収まってきたので、シーラはおそろおそろ目を開けました。そして、彼女はきよとんとしました。なぜなら、目の前に居るはずの魔物の姿がなかったからです。

彼女は、前後左右、そして、天井を探しました。ふいについて襲って来る気かもしれないので、十分に警戒をして…。しかし、見渡す限り魔物の姿はありません。

…逃げたのかしら？

警戒を緩めかけた時、いきなり、足元から声が聞こえて来ました。「ごめんなさい、ごめんなさい。僕が悪かったです！」

驚いて下を見ると、なんと、魔物が手について涙を流していました。

「何？」

あっけにとられるシーラの前で、魔物は泣きながら自分の頭を自分で殴り始めました。

「このバカ！ バカバカ！ 謝れ！ 皆さんに迷惑かけて悪かったと謝れ！」

「…」

シーラは訳が分かず、ただ呆然と見つめるばかりでした。と、ふいに、魔物の顔つきが変わりました。

「人の…体を、勝手に…操…る…な…！」

彼は自分の左手で、自分の右手を押さえようとします。ところが、すぐにまた顔つきが変わり、

「離せ！ バカ。君は叩かなくちゃ分からないよ」

今度は両足で自分の頭を叩きはじめました。

「よせと言っているだろう」

サウザントは、今度は手で足を押さえようとしましたが、足が言うことを聞かないようです。「バカ」とか「やめる」とか一人で暴れています。

何がなんだかさっぱり分かりません。ただ一つはつきりしていたのは、今度こそ魔物を倒すチャンスであるという事だけでした。シーラは、床に落ちていた自分の剣を拾うと、ゆっくりと魔物に近づいていきました。そして、構えました…！

呪いの剣

「シーラ！」

突然、凜とした声が店内に響きました。

驚いて振り返ると、いつの間にかやって来たのか、店の入り口に青い修道服をまとった金髪の女性が立っています。

「エオリア様：！」

シーラは叫びました。

そう…。それは、サンマリネの守りを司る守護神であり、この不思議な剣をアルマンに預けいった張本人の聖魔導師エオリアです。彼女は、そのすみれ色の瞳で床に倒れた魔物の姿をじっと見つめました。

「エオリア様、なんでここに？」

シーラが聞くと、

「剣に呼ばれて来ました」

と、エオリアは答えました。

「剣に？ どういう意味ですか？」

「その説明は後です。それより、みだりに剣をふるってはならないと言っているでしょう？」

向こう気の強いシーラに、常々エオリアは暴力の愚かさを説いていました。

「この場合は仕方ないさ」

父親は娘をかばいました。

「こいつは、魔物なんだ。しかも、ただの魔物じゃねえ。とびつきりの悪党さ。なにしろ、魔界の王子だっていうんだから…」

「魔界の王子？」

エオリアはびっくりしてサウザントを見ました。そして、眉をひそめました。

「驚いた。それは、どういう事でしょう？」

すると、彼女の言葉に答えるように、魔物の手の中で剣がキラリと光りました。

「！」

聖魔導師は剣を見つめました。もう一度剣が光ります。そして、エオリアに訴えかけるように、何度も何度も光ります。聖魔導師は瞳を閉じ、虚空へと耳を傾けました。こんな時、彼女はこの世ならぬ何かと言葉を交わしている事が多いのです。今もそうなのかしら…と、シーラはその横顔をなぜだかうつとり眺めました。やがて、

「そうですか…それがあなたのご意志なら…」

聖魔導師は小さな声で何者かに返事をしました。やはり、この世ならぬものと交信していたようです。彼女は目を開けると、金色の髪を揺らせて武器屋親子を見ました。そして言いました。

「この方を殺しては、なりません」

「でも、こいつは魔族の王子なのよ？」

「それでも、殺してはダメです…」

聖魔導師の言葉では従うより仕方ありません。なにしろ、今まで彼女の言葉に誤りがあった事はないのです。魔族の王子を助けるにもきつと何かの理由があるはずです。シーラはしぶしぶ剣を収めました。

一方、サウザントといえば、一人で暴れるのに疲れてぐったりと床の上に横たわっています。誰かが入って来た気配には気付いたものの、体中が麻痺して注意を払う余裕もありません。そこへ、ふいに、かぐわしい風と共に金色の髪が頬に触れました。顔をあげると、すみれ色の目をした女性が見下ろしていました。彼は不覚にも、その美しさに見とれてしまいました。彼女が肩口の傷に触れ、小さな声で呪文を唱えます。触れられたところから、暖かい光が流れ込んで来るような気がしました。

「ヒールの魔法をかけました。じきに動けるようになるはず」

エオリアが言いました。

なるほど、体から痛みが薄れ、先ほどからの呪縛も解けていくようです。彼はその心地よさに身を任せかけました。いや、一瞬後には魔物の本性を取り戻し「触るな！」と聖魔導師の手をはねのけ、後ろに跳びずさりました。どうやら、回復しきったようです。

「治りましたか」

エオリアが安心したように微笑みました。

ところが、魔物は、恩人に対して挑戦的な態度を示しました。

「回復の魔法を使うとは、貴様、聖魔導師だな！」

などと、剣を構えてみせます。

…言わんこつちやないと、シーラは再び自分の剣を抜きました。

「そうよ、エオリア様はこの街で一番優れた聖魔導師様なのよ！

あんななんか口をきける方じゃないのよ！」

しかし、小娘に一瞥もくれず、

「聖魔導師は、我々魔族の敵である。したがって、この場で殺す！」

言うが早いか、魔物は剣を構えて恩人めがけて飛びかかりました。

「危ない！」

シーラが防御に入りました。

「大丈夫です！ シーラ」

聖魔導師が叫びました。

その瞬間…

キラリ！

と、サウザントの持つ剣の切っ先が激しく光り、

『やめる！ バカ！』

…例の声とともに、宙を舞っていたサウザントの体に先ほど以上のしびれが走りました。全身が強ばり、態勢を崩した彼は垂直に床へと落ちていきました。端から見れば、まるで見えない手で激しくたたき落とされたようです。

「一体なんなの？」

シーラは首を傾げました。

「さつきから、襲いかかると思えば、謝ったり、死にかけたと思ったら、生き返ったり…今だって、勝手に一人で落ちていったわ」

「あの方の持つている剣の力です。剣が、彼に悪事を働かせぬよう縛り付けているのですよ」

「剣？」

シーラは魔物の手の中の『呪の剣』を見つめました。先きほどの青白い光は既に消えています。

「その方は、剣に選ばれたのです。そして、剣は聖なる力で魔界の意志を制御させるのです」

さっぱり話が見えて来ません。剣に選ばれたとはどういう意味でしょう？ しかもあの呪の剣が聖なる力で魔界の意志を制御するとは…。

「剣に選ばれたって…まさか、その剣にかい？」

アルマンがたずねました。

「そうです」

「そうです…って、それは、呪いの剣だろう？」

「呪いの剣などではありません。よく御覧になって。見覚えがあるでしょう？」

「見覚え…ねえ？」

アルマンとシーラは、魔物の手の中の剣をまじまじと眺めました。そういえば、長い事預かっていたにもかかわらず（呪いの恐ろしさにつとめて距離を置いていたためか）じっくり見るのは二人とも初めてです。

「見覚えあるか？ シーラ」

「うっん…」

覚えがありません。

「それでは、こちらの鞘をよく見て下さい。あの剣の鞘です。これならば、見覚えがあるのではないですか？」

聖魔導師は今度は窓際に放り出されていた剣の鞘を二人に見せました。…美しい鞘です。特に金で施された羽模様の細工はとても人の手によるものとは思えません。

その模様を見つめているうちに、シーラの胸にあるイメージが浮かんで来ました。…何かを思い出せそうです。彼女は必死で記憶を辿りました。ところが、鞘のまん中にできた大きな穴を見た途端、せつかく浮かんだイメージが暗い穴の中に吸い込まれるように消えていきます。

「何かしら？ この穴」

シーラは、思考の妨げになる大穴をイライラと見つめました。

「多分、何かの宝石が埋め込まれていた場所だろう。きっと、どこかの悪党がくり抜いて持っついていつちまったのさ」

それにしても、一向に剣の正体は分かりません。

「…降参だ！」

とうとう、アルマンが音を上げました。シーラもあきらめたようです。

「教えて下さい。一体この剣は何なんですか？」

すると、エオリアは答えました。

「本当に分かりませんか？ それは、勇者様の剣なのですよ」

「なんですって？」

「勇者様の剣だって？」

親子は、ほぼ同時に叫びました。

「しっ！ 大きな声を出さないで！ 誰が聞いているか分かりません」

エオリアに制されて、思わずシーラは窓の方を見ました。どこからかコウモリが「キイキイ」と騒ぐ声が聞こえたような気がします。

…と、突然アルマンが叫びました。

「ああ、そうだ、そうだ。確かに言われてみれば！」

「しっ！ 静かに！」

エオリアに再び注意され、アルマンは慌てて口を塞ぎました。彼は、声を落としました。

「確かにこれは勇者様の剣だ！　そして、この大穴はホーリー・ストーンがはまっていたんだ。…なんで、一目で気付かなかったんだらう？　この、武器屋のアルマンともあるう者が！」

商売柄、アルマンには一目見た武器は忘れぬという自負があったのですが…。

「そういえば！」

シーラも小さな声で叫びました。

「そうよ、間違いないわ！　これは勇者様の剣よ！　だった、あたし、この金色の羽細工の事はつきりと見た覚えあるもの。なのに、なんで今まで気付かなかったのかしら？」

しかも、勇者の姿なら、毎日毎日思い返していたのに…

首をかしげる親子に、聖魔導師は言いました。

「もしかして、それも、勇者様の思し召しかもしれません。その剣の正体がばれぬようにと忘却の魔法をかけておられたのでしょうか？　なるほど、それなら剣の正体を思い出せなかった事も納得できません。でも、なんで？　なぜ、忘れさせる必要があったのでしょうか？　そして、どうして、こんな所にこんな大切なものがあるのでしょうか？　記憶は甦ったものの、ますます謎は深まっていきます。」

その頃、床に倒れたサウザントは、ようやく体から痺れが消えていくのを感じていました。うつ伏せながらも、一連のやり取りに耳を濟ませ、彼なりに何か察した事でもあったようです。彼は、剣を杖にしてよろよろと立ち上がりました。

「つまり…やはり勇者はこの町にいるという事だな。…そして、女…貴様は奴の居所を知っているのだろうか？　奴は一体どこにいる？　奴をここにつれて来い！」

…何言ってるのよ、こいつは…

シーラはありったけの軽蔑をこめて魔物を見つめました。

「勇者様なら、とつくに旅立たれてるわよ」

「剣を置いてか？」

魔物の言葉に、シーラは…そしてアルマンもギョツとしました。言われてみれば、勇者が勇者の証である剣を置いて旅立つなんておかしな話です。

「どうやら、町の奴ら全員、その聖魔導師のペテンにかかっているらしいな。どつりで、誰も勇者の居所を知らないわけだ。だが、もう騙されぬぞ。…女：お前は本当の事を知ってるんだろう？ 勇者を出せ。私は、奴の首を取りに来たんだ」

「いいでしょう」

聖魔導師はあっさりとうなずきました。

「はじめから、私は、あなたと勇者様を会わせるために、ここに来たのですから…！」

エオリアの言葉に、サウザントはもちろん武器屋親子も驚きました。勇者がまだこの町にいて、しかも、会う事ができるとは…。

聖魔導師は、店の扉を開けて言いました。

「さあ、その剣を持って、私についておいでなさい。すぐに、勇者様に会わせてさし上げますわ」

そして、さつさと夜の闇に消えていきました。

「待て」

サウザントは、自分の円月刀を拾い上げると慌ててエオリアを追いかけてました。シーラも後を追いました。魔物と聖魔導師を二人きりにする事に危険を感じたからです。さらに、その後をアルマンが追いかけてました。娘の身を案じると同時に、好奇心もあったのです…。

聖堂に眠る秘密

やがて、3人がエオリアに導かれてたどり着いたのは、海の見える丘に建つ『聖マリナ教会』の礼拝堂でした。

石造りのこの部屋は、日曜礼拝の時に町の人達が集まる場所です。ですから、キリストの像を掲げた祭壇も、天井のフレスコ画も、月明かりに輝くステンドグラスも、シーラやアルマンとはすっかり顔なじみでした。

「さあ、こちらへ……」

エオリアは、椅子と椅子との間に敷かれた緋色の絨毯を踏み、普段は教会の者しか近寄れぬ祭壇のそばまで一同を導いていきました。祭壇の中央では聖書を抱くキリストが憂いを秘めた目でこちらを見下ろしています。その脇を賢者や聖母が囲み、一番右脇で、小さな白い天使が天を仰ぎ微笑んでいました。その天使の幼い腕をエオリアは軽くつかみました。そして右側に、ゆっくりと回転させました。すると……、

ぎ……ぎっ

天使の像が横へ動き、なんとそこに地下へと続く石の階段が現れました……。

アルマンとシーラは仰天して地下へ続く闇を見つめました。まさか、こんな所に階段があるなんて、夢にも思っていなかったからです。

「さあ……」

と、エオリアがサウザントに燭台を渡しました。

「…階段を降りて行って下さい」

「この下に、勇者がいるんだな？」

「おられます。さあ、急いで。早くこの入り口を閉じてしまわないと……」

「よし」

サウザントは、燭台を受け取り地下に降りていきました。その後をシーラと親父がおっかなびっくり追いかけて、最後にエオリアが続きます。そして、4人の姿がすっかり消えてしまつと、天使の像がぎーっとな音をたてて元の位置に戻りました。エオリアが、下から入り口を閉じたのです。

サウザントは、燭台の光を頼りに、足早に下へと降りていきました。その後を、残りの3人も追いかけていきます。やがて、階段が終わると、4人は石で囲まれた部屋にたどり着きました。どこにも扉はありません。サウザントは燭台を掲げて首を傾げました。

「行き止まりのようだが…？」

「正面の壁を3回、5回、4回の順でお叩きなさい。そうすれば、扉が開きます」

「その向こうに勇者がいるのだな？」

「おられます」

聖魔導師の言葉に従い、サウザントは壁を叩きました。

トントントン、トントントントントントン、トントントン…

すると、カチンと何かが外れるような音がして、石の扉がゆっくりと開きました。

「勇者ミリオン！」

逸る気持ちを抑えきれず、魔王の息子は扉の向こうに勢いよく飛び込んでいきました。

扉の向こうは、赤い絨毯が敷かれた小さな部屋でした。正面の白い壁には聖母マリアの肖像画が飾られ、そのまん前には小さな祭壇があり金色の箱と十字架が置かれています。

そして、祭壇の前に一人の男がいました。彼は聖母マリアの肖像画を見上げ一心に何か祈っていました。

部屋に飛び込んだサウザントは、その男の後ろ姿を見ると首を傾げました。なぜならば、その後姿が魔物の期待した勇者の姿とは似ても似つかなかったからです。魔界での噂によれば『勇者』は『金髪』で『華奢』な『14才の少年』のはずでした。しかし、目の前

にいるのは、どう見ても『40過ぎ』の『でつぶり』した『黒髪』のオヤジではありませんか！

しかし、サウザントが悩むまでもなく、男の正体はすぐに明らかになりました。聖魔導師が「町長！」と呼びかけたからです。そう、それはサン・マリネ町長、ヤン・バルクでした。（もっともアルマンとシーラには一目で分かっていました…）

「町長、もう来ておられたのですか？」

「はい…先程、シスター・ロザリアから知らせを受けて取るものとりあえず駆付けてまいりました」 町長は、なぜかこちらに背中を向けたままで答えました。そして、とても不安げに（と、シーラ達には思えたのです）聞き返して来ました。

「しかし、エオリア様…本当に例の方は現れたのですか？」

「ええ、確かに。ここにお連れしましたよ」

『例の方』？ 武器屋親子は首をかしげました。…一体、なんの話でしょう？

「そうですね！」

エオリアの言葉を聞くと、町長は天を仰ぎ両の手を合わせ、ためいきをもらしました。

「神よ、感謝します。これで世界は救われることでしょう…」

『世界は救われる』？ …ますますわけが分かりません。武器屋親子がきよとんと顔を見合わせたその時、おもむろに町長は振り返りました。その目は涙にぬれ、口はワナワナと震えています。

彼は顔見知りであるアルマンとシーラには目もくれず、エオリアの横にいるサウザントにまっすぐ近付いていきました。そして、たずねました。

「この方が？ 例の？」

エオリアはうなずきました。

「そうですね、ご覧なさい。この方の持っている剣を…間違いありません」

どうやら『例の方』とはサウザントを指しているようです。

町長は剣を確認すると「確かに！」と叫びました。

「それで、この方のお名前は？」

「サウザント・ローゼン・クロイツ様とおっしゃいます」

「サウザント・ローゼン・クロイツ様！」

震えながらその名を復唱し、町長はいきなりサウザントの腕を握りしめました。

「ようこそいらして下さいました、サウザント様！ 私は当地の町長、ヤン・バルクと申します。今日という日をどれほど待ちわびた事か……」

「は…離せ！ 無礼者！」

サウザントは町長の手を振り払いました。見知らぬ人間にいきなりこんな態度を取られれば、魔物ならずとも面喰らうでしょう。

「…おや？ そのご様子ですとサウザント様は、まだ、何も聞いておられないようですね？」

一体、このオヤジはさつきから何を思わせぶりに言っているのでしょうか？ サウザント不愉快そうに「はあ？」とだけ答えました。

「ええ。何もお話しておりませんわ」

エオリアが答えます。

「外ではどんな魔物に聞かれるか分かりませんが…しかし、ここなら大丈夫ですわ。この部屋の周りには強力な光の結果が張られています。魔王といえども、この部屋の中まで見通す事はできません。ここで全てをお話しようと思っただけですわ」

「なるほど、聖魔導師さまのおっしゃる通りです」

町長はうなずきました。そして、またもや謎めいた事を言いました。

「ならば、今こそ真実を告げる時でしょう」

…真実？ 真実って何でしょう？

「ええ。その通りですわ」

聖魔導師はにっこりと微笑みました。

「でも、その前に『あれ』をお渡ししないと……」

「ああ、そうでしたな。しかし『あれ』は、私にはさわれません。どうか、エオリア様の手で渡してさしあげて下さい…」

エオリアはうなずくと、祭壇の上に置いてあった金色の箱を開け、中から首飾りを取り出しました。銀色の鎖に虹色に輝く石のかけらが下がっています。

「ホーリー・ストーンじゃねえか！」

アルマンが叫びました。そう、その輝きはまさしく、勇者の剣にはめ込まれていたはずの聖石ホーリー・ストーンです。聖石は涙のしずくのようにカットされ聖魔導師の手の中できらきらと揺れました。「けど何でそんな形に」とアルマンは首を傾げました。確かホーリー・ストーンは丸い玉のはずです。

「私がカットしたのですよ」

聖魔導師が答えました。

「涙の形にするのは、それほど難しくはありませんでした」

「へえ〜」

とアルマンはうなります。そりゃたいした技だが、でも、なんでそんな事を？

さて、首飾りを手にエオリアが横に並ぶと、町長は威儀を正すよう背を伸ばしました。それから、咳払いを一つ。そして固唾を飲む一同の前で高らかに言いました。

「サウザント・ローゼン・クロイツ様…勇者の剣を装備する者よ！」「なんだ？」

サウザントがイライラと答えます。何をもったいぶるのもたいがいいにせぬかとも言うように…。

けれど、町長の方はおそるべきテンションの高さで、まるで、ありとあらゆるお祝い事が一度に訪れたような晴れやかさで、誇らしげに『真実』を口にしたのです。

「あなたこそ、新しい勇者様です！」…と。

サウザントは…そして、シーラとアルマンもきょとんとしました。

…新しい勇者様…？

あまりにも予想外の言葉です。何かの聞き間違いでしょうか？

しかし、聞き間違いでは証拠に、今度は聖魔導師が同じ言葉を繰り返しました。

「新しい勇者様。私も町長も、この3カ月というものが現れる日を待っていたのですよ…！ さあ、これをおかけ下さい。ミリオン様からあなたに託された物です」

エオリアは、あつげにとられる魔物の首に、ホーリー・ストーン
のネックレスをかけました。石は魔物の胸の上で満足げにきらきら
と輝きます。

「…ちよ…ちよつと待つてよ！」

たまりかねたシーラが叫びました。

「新しい勇者様って何？ まさか、その悪党の事じゃないわよね？」

「なんだ？ シーラ…それにアルマンも来てたのか？」

町長は、その時はじめて武器屋親子に気付いたように目を丸くしました。

「なんだ、そりゃ？」

アルマンが呆れます。

「オイラもシーラも、さつきからずっといたじゃねえか。まあ、いや。そんな事より、オイラにもよく分からねえな。勇者ミリオン様がいるのに、なんで今更新しい勇者が必要なんだ？ 説明してくれよ」

「説明などいらぬわ…！ 馬鹿馬鹿しい！」

サウザントは心底不愉快な表情をしています。それはそうでしょう。魔王の息子が『新しい勇者』などと、そんな話がどうして信じられるでしょう？ 「おい。聖魔導師！ そんなたわごとを聞かせ
るためにために私をここに連れてきたのか？」

彼は怒りの矛先をエオリアに向けました。

「たわごとではございませんわ。私は確かにミリオン様からつけた
まわったのです。あなたこそが次の勇者様だと」

「話にならん！ もういい。ミリオネスを出せ！ ミリオネスはどこに隠れている？ ここに居るんだろっ？」

勇者ミリオンを倒してしまえば、こんな所に長居は無用なのです。彼は、部屋中のあちこちを歩き勇者の姿を探しました。

「そんな探し方では見つかりませんわ。勇者様は、この奥の隠し部屋にいらっしやるのですから……」

「なんだと？」

「そんなお顔しないで、今すぐ会わせてさし上げます」

エオリアの言葉に、町長が泣きそうな声を上げました。

「ええ！ エオリア様、あれを見せるんですか？」

「見せなければ、皆さん納得していただけないでしょう？」

「そ…そうかもしれません…しかし、あれはできれば誰にも……」

町長は冷や汗をかいています。

「どうした？ 町長」

アルマンが訝しげな顔をしました。

「ミリオン様を見られちゃまずい理由でもあるのか？」

「いや……」

町長は困惑しているようです。そして、しばしば何か考え込んでいましたが、やがて決心したようにうなずきました。

「分かりました。確かに、サウザント様には全て知っておいてもらわないわけにはいきませんまい。お見せいたしましょう」

「よくご決心くださいました」

エオリアはにっこりと笑いました。そして、サウザント達に向かって言いました。

「それでは、今から、あなた方を勇者ミリオン様に会わせて差し上げます」

サウザントの目が輝きました。彼は片手に持っていた燭台を祭壇の上に置き、円月刀に手をやります。シーラ息をのみました。いよいよ憧れの勇者に会えると聞いたとたん、胸がどきどきはじめたのです。アルマンだけが割と冷静でした。もちろん彼にもそれなり

の好奇心はあったのですが…。

ともあれ、ついに対面の時です。3人は固唾を飲み、聖魔導師の一挙一動を見つめました。エオリアは祭壇に向かいました。そして、壁にかけてあるマリアの絵に手をかけようとして、何かを思い出したようにこちらを見ました。

「そう。その前に、一つだけ約束して欲しいのです。今からあなた方が目にする事…それこそが、世界を揺るがす重大な秘密なのです。誓って下さい。何があっても、今から見聞きする事は誰にも話さない」と

『世界を揺るがす重大な秘密?』それは、また仰々しい言葉です。シィラとアルマンは緊張をしながらもうなずきました。しかし、サウザントは無反応です。元より人間などとまともに付き合う気のない魔界の王子にとっては、このなにやら大げさな儀式自体が馬鹿しくてやってられません。

「よろしいですか? サウザント様?」

エオリアが念をおしました。

「誰にも話さないと誓っていただけなければ、勇者様とは会わせられませんよ?」

「分かった、分かった」

サウザントはそっぽを向いて答えました。

「誓えばよいのだろうか?」

どうせ、勇者も、ここにいる人間共も殺してしまうのだから関係ないがな…と心中思いつつ…。

3人の誓いを聞くと、エオリアは改めて壁にかけられたマリアの肖像画を外しました。あらわになった白い壁のまん中に10センチ四方の正方形の窓があつて、金色の鍵がかかっています。彼女はそれを手に取り、壁の左端の小さな鍵穴に入れて回しました。壁が音をたてて横に開きます…。

壁の向こう側は、薄暗い小さな石造りの部屋でした。部屋のまん中には、真鍮のベッドがありました。しかし、勇者の姿は見当たり

ません。

「さあ、お入りなさい」

聖魔導師が一同を促しました。

「そこに、勇者様が寝ておられますわ…」

「どうやら勇者はベッドの上にいるようです。それを確認すると、サウザントが先頭をきって駆け込みました。

なるほど、ひんやりとした部屋のまん中で金髪の少年が布団もかけずに横たわっています。彼の眠る真鍮のベッドの4隅には、虹色に輝く石のかけらが置かれていました。それは、先ほどエオリアの手でサウザントの首にかけられたのと同じ石：つまり、ホーリーストーンです。

「これが、勇者か？」

魔物は少年の寝顔を見下ろしました。金色の髪、あどけなさの残る顔だち、華奢な体つき、なるほど噂に聞く勇者の姿にぴったりとあてはまります。

「そうよ。間違いなく勇者様よ」

いつの間にかそばに来ていたシーラが答えました。

「でも、勇者様…具合でも悪いのかしら？ 真つ青な顔をしているけど…？」

「ふん。具合の悪い奴が布団もかぶらずに眠るか…！ 単に居眠りしているだけだろう？ のんきな奴め。起きろ！ 勇者！ 起きぬか！」

魔物は勇者の体を揺さぶろうと手を延ばし、その体の冷たさにぎよっとしました。

「なんだ？」

サウザントが思わず我が手を引っ込めた時、シーラが悲鳴を上げました。

「勇者様…息をしてない！」

「何？」

魔物は驚いて、少女と彼女の目の前の勇者の顔とを見つめました。

シーラは、勇者の頬に触れています。

「シーラ、勇者様の体に触れてはだめ」

少女の背後から声をかけた聖魔導師に、シーラは呆然としてたずねました。

「エオリア様：なんで、勇者様は息をしていないの？」

「それは…」

聞くまでもありません。

…エオリアは、沈痛な面持ちで答えました。

「…勇者様が亡くなっておられるからです…」

祭りの夜の悲劇

それは『サウザントが新しい勇者だった』などという真実の比ではありません。一同は呆然と立ちすくみ、目の前の少年の顔を見つめるばかりでした。まるで眠っているかのようです。けれど、彼は確かに息をしていません。一体何を言う事ができましょう？ まるで悪夢の中にいるようです。

シーラは気が遠くなりそうでした。いつそ、気を失い、別な場所で目覚め、今日一日起きた事の全てが夢であったと告げられればどれほど良いかもしれませぬ。しかし、不幸にも彼女の気丈な本性は、全てを見極めようと彼女の心を支えてしまうのです。

さすがの魔物も呆然としていました。こんな結末は予想だにしていませんでした。ありとあらゆる考えが頭の中を巡りました。そして、一通り考え終えると、彼は誰にたずねるともなくたずねました。「…いつ、死んだんだ？」

「3ヶ月前、勇者様がこの町に訪れた日の夜です」
エオリアが答えました。

「3ヶ月前？ そんな馬鹿な！ だったら遺体がこんなきれいなはずがねえ！」

アルマンが言いました。彼の疑問はもつともです。エオリアが答えました。

「四隅のホーリー・ストーンのかげらが勇者様の体を守っているのです」

「へ？ あの聖石にはそんな力が？ でもなんで？」

武器屋のオヤジの冷静さとは対照的に、心ここにあらずのサウザントがつぶやきました。

「誰が、殺した？ 双頭のドラゴンか？ それとも…魔界の十騎士か？ しかし、そのような話は一切聞いておらぬぞ…」

「誰が勇者様を殺したのか、なんで勇者様が死んだのか。魔界の手の物に殺されたのか、それとも、病気のためか、あるいは事故死か、誰にも分からないのです」

町長が答えます。

「お城には届けたのか？」

アルマンはとことん冷静です。町長はかぶりを振りました。

「届けられるものか！ こんな事がしたら、世界中がパニックになる」

「…そりゃそうだけど…けど、どうするんだ？ 現に勇者様は死んだんだろう？ いつまでも隠しきれるもんじゃねえぞ。それだけじゃねえ。ミリオン様が亡くなったってんなら、一体誰が魔王を倒すんだ？ 新しい勇者でも見つけられない限り…」

そこまで言ってアルマンは「あ！」と叫びました。先ほどの町長の言葉を思い出したのです。

…新しい勇者様！

彼はサウザントを見ました。

…そういう事だったのか…と。

「認めないわ！」

突然シーラが叫びました。あまりのショックに、ずっと立ち尽くすばかりの彼女でしたが、一連の流れを見るともなく見ているうちに同じ事に気付いたようです。

「それは、私のセリフだ！」

サウザントは怒りに身を震わせていました。いよいよ自分が勇者である事が証明された事ですが、なにより標的の勇者が既に死んでいた事が彼を打ちのめしたのです。

「しかし、全てはミリオン様のご意思なのですよ…」

エオリアが静かに言いました。

「勇者様のご意思ですって？」

シーラが叫びます。

「ミリオン様は死んでいるのに、どうしてあの人の意思が分かるの？ あたしは、こいつが勇者なんて認めない！ 絶対に、絶対に認めない」

「シーラ…、悲しむ気持ちは私だって同じよ、でも…お願いだから、我慢して聞いてちょうだい。町一番の使い手であるあなたには、ちゃんと知っておいてもらいたい。だからここまで来てもらったのよ…」

エオリアにさとされ、シーラは少しだけ冷静になりました。それで、自分の取り乱し方が恥ずかしくなり、聖魔導師に頭を下げました。

「すみません。エオリア様…あたし、ちゃんと聞きますから。最後まで話してください」

平静を装おうとしても、声が震えるのだけはどうしようもありません。しかし、エオリアはそんなシーラをいたわるように肩を抱いて、それから、あの夜起きた出来事をゆっくり語り始めました。

「あの夜。勇者様の歓迎パーティが終わった後、勇者様はホテルマリーナにお泊まりになりました。その夜半、見回りをしていたホテルのオーナーが、異様な物音を耳にしました。勇者様の部屋からでした。不審に思ったオーナーが勇者様の部屋をのぞくと、勇者様は床の上に倒れていました。その時、既に勇者様は息をしておられませんでした。…その知らせを受け、私と町長はホテルにかけつけました。その時、勇者様の御遺体はベッドに寝かされておりました。まるで眠っているかのような美しい死に顔でした。私達は、悲しむと同時に、途方にくれました。魔王を倒し、世界を救える方を永遠に失ってしまったからです。一体、この先、どうすればいいのでしょうか？ 勇者様の死に顔を前に考えあぐねていると、突然、誰かが

私に話しかけて来ました」

…声は、言いました。

『エオリア、エオリア。聞こえる？ 僕だよ、勇者ミリオンだよ』
それは、頭の中に響くような不思議な声でした。

「勇者様ですって？」

エオリアは驚きました。目の前には勇者の遺体が先きほどと変わらずに横たわっているのです。しかし、すぐにピンと来ました。葬儀に訪れた時、このような声をしばしば聞く事があるからです。

「分かりました。あなたは勇者様の魂ですね？」

聖魔導師は姿なき声に言いました。声は嬉しそうに答えました。

『さすがだね。その通り、僕は幽霊さ！』

「やっぱり…しかし、それなら、早く天国の門をおくぐり下さい。そうしないと、闇の世界の住人ゴーストの仲間になられてしまいますよ」

死後も天国の門をくぐらずにこの世に執着する魂は、いつか天国への道を見失ってしまいます。よりどころのない彼らは、悪霊と化し、いつか闇の世界に堕ちてしまうのです。

「そうなれば、あなたも魔王の手先となって人間を苦しめる事になるでしょう。光の者が闇に堕ちた時ほど救われぬ事はありません。あなたには、そんな風になって欲しくないのです」

『分かってる。でも、僕はまだ天国の門はくぐれないよ。だって、魔王を倒していないもの』

「その事は私も残念に思います。けれど、仕方のない事です。これも運命。勇者さまの寿命だったのでしょうか…」

『全然違うよ！ 天使の話では、僕の寿命はまだ尽きてないはずなんだ』

「え？ 寿命が尽きてないのに亡くなられたのですか？」

『そうだよ』

「それは、奇妙な話ですね」

聖魔導師は首を傾げました。自殺でもしない限り、寿命も尽きな

「うちに死ぬ事などありえないからです。」

「だろ？ 僕が自殺なんかするわけないから、何か闇の手のものの仕業に違いないよ。」

「死んだ時の事は覚えていないのですか？」

「それが、全然覚えてないんだ。天界にも記録が無いらしい。もしかして、これは何者かの陰謀じゃないかと天使が言っていた。そして、死因が分からない限り天国の門はくぐらせられないって。それで僕は天国の門の直前から引き返して来たんだ。僕の死んだ原因を探り、陰謀をあばき。そしてこれは個人的目標だけど、魔王を倒さなきゃ僕は天国に行けないんだよ！」

「けれど、いくら勇者様といえども、魂だけではこの現世ではどうしようもありませんわ」

「分かっている。だから、君に協力を頼みたいんだ」

「協力？ 何をすればいいんですか？」

「うん。まず始めに、僕の体を腐らないように守って欲しいんだ。体さえ残っていれば、魂が魔界の手に落ちる事はないらしい」

「けれど、勇者様。肉体というものは、やがて腐り、土に溶けて消えてしまうものですわ」

「一つだけ方法がある。僕の剣に埋め込んであるホーリー・ストーンを5つに砕き、そのうちの4つを僕の寝ているベッドの四隅に置くんだ。そうすれば、石のかけらが結界を張り僕の体が腐るのを防いでくれる。君ならあの石に触る事ができるだろう？」

「勇者以外の者に触れられる事を拒む聖石も、修行を重ねた聖魔導師であれば触れる事ができるのです。」

「分かりました。自信はありませんが、やってみましょう」

「ありがとう。そして、5つに砕いた残りのひとつかけらを、新しい勇者に渡しておくね」

「新しい勇者様？」

「うん。天使の話によれば、僕ほどじゃ無いけど、強い力を持った奴がこの世界にもう一人居るらしい。いろいろさしさわりのある

奴らしいけど、ボクが力を貸せばなんとか魔王を倒せるだろうっていうんだ。そいつの星回りのに、近い内きつとこの町に来るはずだから、準備を整えて待ってるっていいって」

「天使様がおっしゃったのですか？ その方が、ここに来ると？」

『そうだよ』

「でも、どうやって、その方が新しい勇者様だと分かるのですか？」

『僕の剣を使うといいよ』

「剣を？」

『そうさ。僕の剣を、人目に触れやすい場所に置くんだけ。そうだね、この町の武器屋とかがいんじゃないかな…？ 奴は必ず僕の剣を装備できるはず。それが目印さ。奴が見つかつたら、聖なる光で君に知らせるよ…』

「…それで、オイラの店にあの剣を持って来ってわけか」

アルマンが感心したようにうなずきました。

「そうです。そして、3ヵ月後の今日、店のある方角から強い光を感じました。私は、シスター・ロザリアに町長への伝言を頼み、あなたの店に駆けつけました。後はあなた方もご存知の通りです」

「…なるほどね。少しは納得いったかもな？」

アルマンは言いました。もつとも、それ以上に納得いかないところがあるのですが…。いや、魔物にはまったく納得いかないようです。魔界の王子は怒声を上げました。

「冗談ではない！ 何もかも納得いかぬ。勇者が死んだ事も、その死因が分からぬ事もだ。言っておくが、この件に関しては魔界は干渉しておらぬ。もし、このような重大な事に魔界人が関わっておれば、魔王が知らぬわけがない！ したがって、息子である私をこの町によこすはずもない」

「奇妙ですな。あなたはまるでご自分が魔王の息子だともいうような事をおっしゃる。は、は、は」

サウザントの言葉を聞いて、町長がのんきに笑いました。

「『よくな』じゃないでしょう?」

シーラが冷たく言います。「まさか、知らなかったわけじゃないと思うけど、その男は魔王の息子なのよ」

「まさか」

町長は笑いながら答えました。

「次期勇者様が魔王の息子などという話があるはずない」

「ところがあるんだよな」

アルマンが言いました。

「昼間、海が荒れただろう? その原因がこいつさ。海底からやってきたのをシーラが見ていたんだ」

「海が?」

その一件は町長も聞き知っています。しかし…

「まさか、嘘ですよエオリア様。こいつらの言ってる事はでたらめですよね」

町長は苦笑いを浮かべて聖魔導師を見ました。エオリアは無言です。

「まさか…」

町長はその沈黙の意味を悟り青ざめました。

「本当なのか?」

魔物にたずねます。

「その通りだ。私は大ゾーマ帝国の後継ぎである。その私を捕まえ、新しい勇者とは、笑止な!」

「し…信じられん!」 町長はわなわなと震えました。

「よ…よくも、よくも私を騙してくれたな!? 魔王の息子が新しい勇者様などと汚らわしい! おい、シーラ、何してる? この魔物を殺してしまえ」

「でも…」

シーラは聖魔導師をちらりと見ました。彼女から魔物を殺すなど言われているのです。案の定、聖魔導師が魔物をかばいました。

「お待ち下さい、町長。この方は、確かに魔王の息子ですが、同時

に新しい勇者様でもあるのですよ」

しかし、町長も引き下がりません。

「エオリア様、いくらあなたの言葉でも、こればかりは納得いきません。魔王の息子が勇者とは、いくらなんでも無理があります」
「いいえ。これは勇者様の意志なのです。それだけではありません。私には分かるのです。この方には『闇の波動』がほとんど感じられません。まるきり…そう、人間のようです」

「私は、人間などではない！」

突然、魔物が叫びました。

尋常でないその声に一同は驚いて魔物の方を見ました。彼自身、自分の取り乱しように驚いているようです。

聖魔導師は、魔物の顔をじつと見つめました…。まるで何かを探るように…。その視線に耐えられず、魔物は顔を背けました。そして、不自然な程の冷静さで言いました。

「いずれにしても、勇者が死んでいてはとうしようもない。今日のところはおとなしく帰ってやるから、二度とくだらぬたわごとをほざくな」

「いいえ、あなたは勇者です」

エオリアがきっぱりと言いました。

「…あなたも、心の底で気付いておられるのではないのですか？
自分が、魔界人にはなれないと…」

「黙れ！」

サウザントは叫ぶと彼らに背中を向けました。そして、

「私はまぎれもなく魔界人だ！」

と言い捨てて、足音も荒く部屋を出て行きました。

海中の決闘

サンマリネの東海岸に、大きな三日月がかかっています。

その月を左手に眺めながら…ざくざくと…、サウザントは砂浜を歩いていきました。胸にかけたホーリー・ストーンのかけらが月の光をつけてキラキラと輝いています。しかし、石の主であるサウザントの顔は、全く冴えませんでした。

『勇者ミリオネスが死んだ』という事実を、彼はまだ受け入れられずにいました。理由は2つありました。1つは、世界を守るべき勇者が、魔王に挑む前に死ぬなどという事は、とても信じられない話だったからです。いまだに、悪い冗談のようにしか思えません。そして、もう1つは…むしろこちらの方が重要なのですが…それが『勇者を倒して魔王の後継者である自分の地位を確固たるものにする』という、彼のひそやかな野望の頓挫を意味したからです。しかも、

『あなたこそが、新しい勇者なのです』

などと、屈辱的な指名をされ、人間の小娘にはいたぶられ、サウザントにとって、今回の旅は完全な失敗でした。二度と触れたくない思い出として一生残るでしょう。

…それにしても、この一連の出来事を魔王になんと説明しよう？ そう思うと、彼の心はいっそう暗く沈みました。バカ正直に何もかも話せば、厳しい魔王はいよいよよよよの悪い嫡子を排斥して弟に王位を次がせる考えを固めるかもしれません。しかし、

…ええい！ なるようにしかならぬ！ 潔く帰るぞ！

サウザントは悩むのをやめました。終わった事を、あれこれ悔やんだって仕方ないのです。父魔王の信頼を取り戻す為には、他で手柄を立てるしかありません。彼は、手の平を海に向かって開き、呪文を唱えはじめました。

「暗き海よ、魔界への道を開きたまえ…」

と、その時

キーン

ガラスを割るような高い音がどこからか聞こえて来ました。

「？」

音は、比較的近いところから聞こえたような気がします。

キーン

サウザントは辺りを見回しました。

キーン

それは、左下から聞こえて来るようです。

視線を左に落とすと、自分の佩いている剣が、ぼうつと青白く光っているのに気付きました。しかも、その剣は、見なれた自分の剣ではなくて、先程武器屋で手にした『勇者の剣』でした。

：「なんだ、こんな物を持って来ていたのか、いまましい…」

舌打ちして剣を眺めているうち、サウザントは「あっ」と思いました。

「いい事を思いついた！ この剣を魔王に見せて『私は勇者を倒しました。その証拠にこの剣を持って来ました』と嘘をつけばいい。どうせ勇者は死んだんだ。骨まで焼いてしまったと言えば、父王も信じるに違いない！」

「なんとという素晴らしい（私達から見ればこそく）思いつきですよー！」

「そうだ、勇者を倒したのはこの私だ！ これで次の魔王の座は、私の物だ！ ざまあみろ、ロムデル！ ぐははははははははは！」

彼は、喜びの余り大声で笑うと、再び墨のような海原に向かい勢いよく手を広げました。

「暗き海よ、魔界への道を開きたまえ…アングアラン・リ・ウエル・フオウル・グアイン…」

海を裂く呪文です。一刻も早く魔界へ帰り、弟の泣きつ面を見るのが楽しみでなりません。

ところが、その時…

「君って案外、せこいんだね」

突然、背後から奇妙な声が聞こえて来ました。

「？」

彼は振り返りました。しかし誰もいません。

「なんか、がっかりだな」

再び、今度は頭の上から聞こえて来ます。

「??？」

見上げて誰もいません。

「そんなんじゃ、逆立ちしたって魔王になるのは無理だよ」

聞き捨てならぬセリフです。サウザントはカツとなって剣を抜きました。

「誰だ！？ 姿を現せ！」

すると、目の前くるくると金色の光が渦巻き、そのまん中から金色の髪の少年がぼんと飛び出して来ました。彼は空中で一回転するとあざやかに砂の上に着地し、にこにこサウザントを見て「ハロ―！」と手を振りました。

その顔を見て、サウザントは驚きのあまり目を見張りました。

「嘘だ……」

その、不思議な登場の仕方に驚いたのではありません。その、金色の光をまとった少年の顔は…それは、ありえない人物の顔でした。そう、そんなことがあるはずがないのです。これが夢か、それとも、この砂浜に来るまでの出来事が夢だったというのでないのなら。

しかし、彼の背後に立っていた少年は、そんなサウザントの驚きには一切無頓着で、肩まであるウェイブのかかった金色の髪をゆらせ、まるでイタズラが成功したの喜んでいる子供みたいに、クスクスと笑っていました。

いつもの尊大なサウザントならムツとして「何がおかしい？」と詰め寄るところです。が、何しろ、その時の彼にはそんな余裕がありませんでした。それで、なんだかのどの奥に物をつまらせたよう

な声で、やっとこんな事を言ったのです。

「お前は……」

けれど、それきり言葉が続きません。金色の髪の少年は、まるでサウザントの心を読んだかのように言いました。

「ミリオンでいいよ！ はじめましてサウザント君！」

やはり……？ いや、しかし……

ありえない名前です。けれど、少年は、はっきりその名を口にしました。サウザントは、ふるえながらその名を復唱しました。

「ミリオン……？」

……ミリオン。……ミリオネス。……ミリオネス・クライストス・ホワイト・ウィンド。……嘘だろう？

それは、まさしく彼が探し求めていた勇者の名前でした。けれど、勇者は3カ月前に死んだはずです。ついさつき、教会の地下でその死に顔を間近に見たではありませんか！？

しかし、魔界のプリンスは、そう長くは悩んでおりませんでした。彼なりに状況を整理し直し、結論として自分に都合の良い解釈を導き出しました。

……考えてみれば、あの遺体が本物という保証はないではないか？ そうだ。あれはきつと偽者だったのだ。おのれ、あの聖魔導師め。小娘やじじい共とグルになって、この私をたばかったな。もう少しで騙されるところだった。

サウザントの目に邪悪な光が甦りました。なくしかけた希望を取り戻したせいでしょうか？ 彼は、剣（勇者の！）をすらりと抜くと、その切っ先をミリオンに向け、とうとうと語り始めました。

「我が名は魔界のプリンス、サウザント・ローゼン・クロイツ。魔界のプリンスなり！ 漆黒の闇の彼方より深海を越え旅するものなり」

「知ってるよ」

ミリオンが話の腰をおります。しかし、お構いなしでサウザントは続けました。

「光の子、勇者ミリオネス！ 私はおおいなる闇の意志を受け、お前を倒すために大ゾーマ帝国よりやって来た」

「それも知ってるよ。君の事は何だって知ってるよ。その上で勇者にスカウトしたんだから」

それでも、半ば自分に酔い気味のサウザントは、ミリオンの言葉など聞こえていないかのように喋り続けます。

「我が祖国ゾーマ帝国と、暗黒世界の繁栄のために、お前の首をいただく！」

全て喋り終わると、魔界のプリンスは剣を構え、鷹のごとく勇者に襲いかかりました。ミリオンは逃げようともせずその場に立つています。勇者の剣は、うなりを上げてミリオンの体をまっふたつに……

……と、思いきや、

すかつ！

空しい音をたてて、剣とサウザントはミリオンの体をすり抜け……ずぼっ！

そのままの勢いで、頭から砂浜に突っ込んで倒れました。

「……」

しばしの静寂が流れます。

やがて、砂から尻だけ出したサウザントに向かい、ミリオンは心配そうにたずねました。

「大丈夫？」

「……」

サウザントはのろのろと砂の中から顔を出しました。そして、砂の上にあぐらをかき、苦悩の表情を浮かべました。

「なぜ斬れぬ？ 私が未熟だからか？ それとも勇者め……怪しい技でも使ったか？」

「技じゃないよ。ボクは幽霊だよ。剣で斬れるわけないだろ？」

「幽霊？」

「そつだよ。さっき、君も教会の隠し部屋ではつきり見てたじゃない

いか。ボクはもう死んじゃってるんだ」

「……」

「死んじゃった僕は、このままじゃ肉体に戻れないから、魔王を倒せるようになるまで、その剣に宿る事にしたんだ」

ミリオンは、そう言ってサウザントの持っている勇者の剣を指差しました。

「なぜかって？ それは、この剣を持つ人間……つまり勇者である君……を助け、魔王を倒す手助けをするためさ。この剣に宿る事で、僕はこの剣に魔法の力を授け、攻撃力を何倍にもする事ができる。分かりやすく言うと、僕は剣の精霊になったって事さ」

ミリオンは、上機嫌で（少なくともサウザントには上機嫌に見えたのです）べらべらと喋り続けました。しかし、サウザントはいえば、砂の上で呆然としたままです。

……じゃあ、やっぱり、勇者は本当に死んだのか。

再び突き付けられた事實は、一度目よりもさらに大きなダメージを彼に与えました。彼は砂浜にうずくまり、しばらく身じろぎもできませんでした。

そうこうしているうち、月はさらに天高く昇り、町はいよいよひっそりと寝静まっていきます。

南の海岸には明かり一つなく、沖の方で灯台の光りがチラチラと明滅するのが見えるばかりです。そして、あれは何の音でしようか……？ 潮騒にまじりどこからか、ズン……ズン……と、地鳴りのような音が響いて来ます。

「元気だしなよ。ボクまで悲しくなってくるじゃないか」

ミリオンがいつまでも落ち込んでいるサウザントをなぐさめて言いました。

「うるさい。お前みたいな奴に私の気持ち分かるものか……！ お前を倒し、父上に認めていただく事だけを目標にして生きて来たのに……！」

「そりゃ、気の毒とは思っけどさ……でも、僕を倒すという目標は達

成できなかったけど、君には『勇者になる』という新たな目標ができたじゃないか」

「勝手な目標を設定するな！」

サウザントは腹立ちまぎれに拳で砂を叩きました。
すると、

ズウン…

ものすごい振動が起きました。

ミリオンとサウザントはびっくりして顔を見合わせました。

「今の、君がやったの？」

「まさか。私ではない」

と、

ズウン…

再びものすごい振動です。

「海の方からではないか？」

「だね」

ミリオンはうなずくと、何かを感じ取るつとめるかのように目を閉じました。

ズウン…ズウン…ズウン…ズウン

振動の起きる間隔が短くなり、それとも波のうねりが激しくなってくるようです。

「一体、何の音だ？」

と、サウザントは海を見つめました。

「モンスターだよ」

ミリオンが囁きました。

「あちらの方向に、海を割ってごらん」

「指図するな」

ムツとしながらも、サウザントは言われた方向へと海を裂く呪文を唱えました。

「暗き海よ、魔界への道を開きたまえ…アングアラン・リ・ウエル・
フオウル・グアイン・シー・ヤ！」

ザザザ！

海面に赤い光が走り、その線を中心に海がざっくりと二つに割れます。

「行くぞ！」

サウザントは、砂浜から海の中にできた道へかけ込みました。その後を、ミリオンがフワフワ飛んで追いかけて行きます。彼の全身から放たれる金色の光が、行く先を照らします。やがて、暗く長く続く海水の壁のはるか彼方に、山のような化け物の姿が見えて来ました。人に似て、人にあらず。全身緑のウロコに覆われ、ひれのよな耳とナマズのようなヒゲを持った巨人です。

「シーボーズじゃないか！ 何をしてるんだ？」

サウザントは叫びました。

海底にすむ獣人『シーボーズ』は、海が割れたのにも気付かぬ様子でしきりに足踏みを続けていました。それはまるで、子供がダダをこねているような仕種でしたが、獣人が足を踏みならすたびに、ズウン…ズウン…と地面が揺れ、激しく波がうねります。

「シーボーズ！ こっちを向け」

サウザントはもう一度叫びました。それでも獣人は気付きません。

「シーボーズ、こっちを向かぬか！ 私だ」

さらに声を張り上げると、化け物はやっとこちらを向きました。

しかし、呼び声の主がサウザントと気付くやあからさまにバカにした表情を浮かべます。

「何だ？ 出来損ないか」

その言葉にサウザントはムツとしました。しかし、つとめて平静を装ったのは、この獣人が三つ目コウモリよりはランクの高いモンスターだったからでしょうか？

「何をしている？」

「ロムデル様の命令で、津波を起しに来たのさ」

「ロムデルだと？」

「そうさ。次期魔王様の御命令さ」

その言葉にサウザントの眉がぴくりと動きます。しかし、それでも彼は平静を装い、

「何のために？」

とたずねました。

「勇者を殺すためさ。勇者は間違いなくあの町に居るのは分かっている。だから『津波をおこして勇者ごとあの町を沈めてしまえ』と、ロムデル様から御命令があった」

「よけいな事をするな。勇者討伐の命は、魔王直々にこの私がうけたまわっておる」

「けっ」

シーボーズが冷笑しました。

「一日かかっても、あんなちっぽけな町にひそんでいる勇者一匹見つけられないお前に、勇者を倒せるか！」

「なんだと？」

「大体、偉大なる魔王の息子なら、ちまちまと隠れてるネズミなど探さずに、町ごと滅ぼしてしまうのが常道だろう？ それが、なんだお前は？ いまだにこんな所をうろろして。大方、また人間に同情でもしているのだろう？ この出来損ないが」

「出来損ないと言っな！ 勇者の居所ならとっくにつきとめている。今更、町ごと滅ぼす必要もないというだけだ」

「なんだと？ 勇者が見つかったと？」

「あ…ああ。見つかったとも」

…ただし、死んでたけどな。サウザントは心の中でつぶやきました。

「どこに居る？ すぐに殺しに行くぞ。さあ教えろ、どこに居る」

…さあ、どこと言おう？ まさか死んだとは言えぬし。それよりあれ？ 勇者の奴どこに消えた？ ついさっきまで私の側に居たのに。そういえば、シーボーズの奴め、勇者の姿に気付きもしなかったようだが？

などとサウザントが考えていると、

「さつさと答えんか！」

シーボーズが激しく足を踏みならしました。その振動で、また大波が起こります。

「まあ、落ち着け。勇者はな、勇者は…。」

…そうだ、私が倒してしまつたと言おう！

サウザントは手を叩きました。そう。それが最上の策ではありませんか。そういえば、先程、魔王を相手に考えていた目論みを、勇者の幽霊などを相手にしているうち、いつの間にか忘れていたのです。サウザントは口を開きました。

「勇者なら、私が…。」

ところが、その先の言葉が出て来ません。出て来ないばかりか、彼の口は彼の意志に反して、こんな事を言つたのです。

「勇者ならお前の目の前にいる。そしてお前を倒す！」

言つてしまつてからサウザントは、自分の言葉に驚いて目をぱちくりとさせました。…今のはなんだ？ 私が言つたんじゃないぞ？ でも確かに私の口が動いた。これは、まるでさっきの武器屋での出来事と一緒にじゃないか？

「目の前だと？」

シーボーズがギョロリとサウザントを睨み付けました。

「俺の目の前には、出来損ない王子以外にないじゃないか。そうか、つまり、お前が勇者つて事か？ これは面白い」

サウザントは、首を振つてこう言おうとしました。

『いや、違う。今のは私の意志ではない』

しかし、体も口もサウザントの思うようには動きません。それどころか、サウザントの口は、また勝手な事を喋り始めます。

「そうさ、ボクが勇者さ！」

その口の聞き方…！ サウザントはやっと全てを理解しました。さつき、武器屋で自分の体を操つたのも、今、自分を操っているのも…。

しかし、その名を明確に意識に昇らせるより前に、シーボーズが

にじり寄って来ました。

「つまり、このシーボーズ様を倒すという事か？ お前が？」

「もちろんだとも！ 君みたいな弱い奴、一撃で倒してみせるね！」
そう言ってサウザントはガッツポーズをつくり、タップダンスを踏みました。（もちろん全て彼の意志ではありません）

その仕種は、シーボーズの逆鱗にふれるに十分でした。化け物は、顔の血管を浮き上がらせ、ナマズのようなヒゲをピクピクと震わせると、

「いいだろう、前々からめえの事は気に入らなかつたんだ」

と、巨大なこぶしをサウザントに向けてブンとふり降ろしました。

ズウウウウン…！

シーボーズのこぶしは物凄い轟音とともに、あらわになっっている海底の岩を砕きました。その衝撃で海が大きく波立ちます。

間一髪で体の自由が戻り、後ろに逃れたサウザントは叫びました。

「やめろ！ シーボーズ。これは『勇者ミリオネス』の企みだ！」

そうです、先ほどからずっとサウザントの体を操っていた黒幕は、あのいまましい金色の勇者だったのです。しかし、シーボーズは聞く耳をもちませんでした。それどころか、

「やかましい！」

と、雷のような声で叫び、もう一度そのこぶしを振り降ろしたのです…！

ズウウウウン…！

再び大波が立ちました。波に呑まれないようにサウザントが空高くジャンプすると、

ガバツ…！

大きな緑色の壁が、宙に飛んだサーザントの目の前に迫って来ました。

「うわ！」

気がつく、彼はネコに捕らえられた小ねずみのように、シーボーズの手の中に握りしめられていました。巨人は、サウザントを鼻

先に近付けて言いました。

「オレはてめえの事なんか、ハナから仲間とも王子とも思っちゃいねえんだよ！ この出来損ない！」

そして、両手にじわじわと力を加え、サウザントを握りつぶそうとしました。

「…やめろ！」

サウザントは悲鳴をあげました。化け物は楽しそうに手の力をどんどん加えて行きます。その苦しさに、サウザントの意識はもうろうとしていきました。

「ゲへへへ。苦しめ、苦しめ」

シーボーズの上品な笑い声を遠くで聞きながら、サウザントは思いました。

「ああ、私はこれで死ぬのだな。結局最後までみじめなものだった。ああ、死にたくない！ あのハナたれガキに勝つまでは死にたくない！…」

その時、どこからか…勇者ミリオンの声が聞こえて来ました。

『安心して、君を死なせたりしないさ。後は僕に任せて！』

言葉が終わると同時に、サウザントの胸のホーリー・ストーンがカツと光りました。光はサウザントの体を覆うように走り、外側に高熱を発しました。

「あちっ！」

シーボーズが驚いて手を放しました。急に自由になったサウザントの体は、引力に逆らえずに地上に落ちて行きます。しかし、地面に激突するより先に宙でひらりと一回転しあざやかに着地しました。そして、悪戯っぽい笑顔を浮かべ巨人を指差しました。

「よく分かったよ。君はとっても弱いんだね！」

「なんだとー？」

真っ赤に腫れた手のひらを、息でふーふーと冷まししながら、シーボーズが溶岩のように燃える目でサウザントを睨み付けます。

「もう一度言ってみる」

「君は弱いつて言ったのさ！」

サウザントは、さりと答えました。

もちろんそれは、彼の本意では有りません。先程、あの声が聞こえた瞬間から、サウザントの体は再び自由を奪われ、勇者ミリオンの好きなように操られているのです。

勇者に操られたサウザントは、だめ押しのごとくこう付け加えました。

「君みたいでっかいただけがとりえの奴を世間ではこう言うのさ！」

『ウドの大木！』ってね。一つ勉強になっただろ！？」

シーボーズの緑の顔が、絵の具で染めたように赤くなっていきました。

「もう、許さん！」

化け物は大きく息を吸い込み、頬をプクーとふくらませました。

やがて、それがはち切れんばかりの大きさになった所で…

ぶーーーーー！！

口から滝のように水を吹き出しました！

水は轟々と音を立ててサウザントめがけて押し寄せました。呑み込まれてはならぬと、勇者に操られたサウザントは地面を蹴ってひらりと宙に舞い上がりました。

「逃がすか！」

シーボーズが宙に向けて水を吐き出して来ます。

それをよけながら、サウザントは勇者の剣を鞘から抜き、頭上に構えました。どうしてか、彼の体は宙に浮かんだままです。これも、勇者の力のなせる技でしょうか？

「あんな奴に、こんな技使うまでもないけどさ」

ふと、ミリオンの言葉がサウザントの口からもれます。

「君の力を知るためにあえて使わせてもらうよ？」

…何をだ？

奥底に追いやられたサウザントの意識が問いかけます。

…何をする気だ？ 勇者

しかし、それには答えず、ミリオンは剣を振りかざしたまま唱え始めました。

「神よ、地上に眠る数多の人々の夢を守る力を僕にお与え下さい！
…ラ・ミーヤ・リスト・ミ・テクト・ア・ミリオン・ドリーム・
エツト…」

その不思議な呪文に合わせるように、ひんやりとした白い光が勇者の剣を包みはじめました。呪文を唱え続けながら、彼は剣を静かに十字にきりました。闇の中に剣が残した軌跡そのままの、青白い大きな光の十字架が浮かびます。

…あの十字架は？

意識の奥でサウザントがつぶやくより先に、

「ホワイトクロス！」

ミリオンが叫び、大きく剣を振りました。

すると、光が勢いよく走り出し、ぼんやりと空を見上げていたシリボーズの体を十字に切り裂きました。化け物は緑色の血を噴き出し、声もなくその場に倒れました。

…ホワイトクロスだって？

意識の奥でサウザントがつぶやきました。

『そつだよ』

ミリオンの声が答えます。

気がつけば、サウザントを縛り付けていた勇者の戒めは解けていました。にもかかわらず、全ての力が急速に力が抜けていくようです。轟音を立て、裂けた海が一つになってゆきました。

「魔力が…」

サウザントはつぶやきました。

『今のでほとんど使い果たしたみたいだね。海を裂き続ける事は無理みたいだ。君も、はやく砂浜に戻らないとやばいよ』

「分かってる、分かってる。でも…」

…どうにも意識がはっきりとせぬ…

それでも宙に舞ったまま、サウザントは荒れ狂う海を眺め続けました。

「ホワイトクロスだって？」

サウザントは再びつぶやきました。

「…嘘に決まってる。勇者しか使えないはずの光魔法最高峰の技を、私が…使える…はず…が…」

たとえ、勇者に操られていたにしろ…サウザントは自分の意識が波のようにゆらゆらと揺らめくの感じはじめました。

南の浜辺から、声が聞こえます。そちらを見ると、町の人々が集まりサウザントを指差して騒いでいます。その中に、シーラの姿が見えます。町長も、武器屋の親父もいます。そして、エオリアも。みな顔は一様に輝いています。

サウザントは焦点の合わない目で、暁の光を受ける彼等を見つめました。

一方北の闇の中から別な声が響いてきます。

「見たぞ！ サウザントがシーボースを殺した。サウザントは裏切り者だ、魔王様に伝えてやる！」

ぼんやりとした頭でその声を聞きながら、サウザントは思いました。あれは…、あの声はカーミンだ。

…あいつは、間違いなく父上にこの事を伝えるに違いない…

そこで、サウザントの意識は途切れしました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9375a/>

勇者，その名は魔界王子 1章

2008年11月7日09時25分発行